特集

生鮮ぶどうの輸入

☆2018年は、全国の輸入数量及び金額ともに過去最高！
☆2018年は、オーストラリア産がチリ産を抜いて2位に！
☆港別のシェアは、輸入数量及び金額ともに東京港が全国で1位！
☆南半球産は3月から5月、北半球産は10月から12月が輸入のピーク

はじめに

夏から秋にかけては、国産ぶどうが出産を迎えますが、それ以外の季節は、輸入ぶどうが出回っているようです。近年、この輸入ぶどうをよく見かけるようになったと思いますか？


今回は、生鮮ぶどうにスポットを当ててみました。

輸入数量及び金額の推移（図1）

本特集の「生鮮ぶどう」は、輸入統計品目番号0806.10に分類されるものについてまとめたものです。※2019年5月分は9桁速報値です。
原産国別動向

2018年の原産国別輸入数量及び金額（表）を見ると、数量金額ともに、首位米国、2位オーストラリア、3位チリとなっており、この3ヶ国で95%以上を占めています。

原産国別輸入数量の推移（図2）を見ると、2015年まではチリが首位、米国が2位となっていましたが、2016年に米国とオーストラリアが急増し、米国が首位に浮上、オーストラリアも2018年に2位へと順位の入れ替わりがありました。米国やオーストラリアから輸入される生鮮ぶどうは、種もなく皮ごと食べられる品種のものが多いようです。業界によるとこれらの品種は、食べやすさと手ごろな価格帯で消費者の人気を集めることが多かったことでした。

オーストラリア産生鮮ぶどうは、かつて植物防疫法により輸入が禁止されていたが、2014年に条件付きで輸入が解禁となりました。輸入数量構成比の推移（図3）を見ると、オーストラリアの輸入がはじまった2014年以降、同国は1.3%から29.1%と27.8ポイントの大幅増、一方で、チリは54.7%から24.7%と30.0ポイントの大幅減となっています。

オーストラリアとチリは南半球に位置し、日本へ輸入される時期もほぼ同じです。業界によると、オーストラリア産生鮮ぶどうは、チリ産生鮮ぶどうの半分の航海日数で輸送することが可能であるため、より新鮮なもののが輸入できる強みがあるということでした。

<table>
<thead>
<tr>
<th>原産国別輸入数量及び金額（2018年）（表）</th>
<th>数量 (トン)</th>
<th>原産国名</th>
<th>金額 (百万円)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>米国</td>
<td>15,858</td>
<td>42.8%</td>
<td>5,505</td>
</tr>
<tr>
<td>オーストラリア</td>
<td>10,811</td>
<td>29.1%</td>
<td>3,471</td>
</tr>
<tr>
<td>チリ</td>
<td>9,165</td>
<td>24.7%</td>
<td>2,224</td>
</tr>
<tr>
<td>メキシコ</td>
<td>1,260</td>
<td>3.4%</td>
<td>565</td>
</tr>
<tr>
<td>ニュージーランド</td>
<td>1</td>
<td>0.0%</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>37,095</td>
<td>100.0%</td>
<td>11,769</td>
</tr>
</tbody>
</table>
月別動向
直近2年の全国の月別原産国別輸入数量の推移（図4）を見ると、3月〜5月に南半球のチリ産とオーストラリア産が、10月〜12月に北半球の米国産がそれぞれ輸入のピークを迎えます。
国産ぶどうの出回り時期は、夏から秋にかけて（図5）ですので、私たちは、年間を通じてぶどうを食べることができるのです。

港別動向
2018年の港別の構成比（図6・7）を見ると、東京港は数量51.5％、金額51.9％となっており、全国の輸入量の約半分を占め首位となっています。その他の上位は、横浜港、大阪港、神戸港、堺港となっており、海港が上位を占めています。生鮮ぶどうのほとんどは、温度調整が可能なコンテナにより船便で輸送されています。
なお、東京港は1993年以降、連続して首位となっています（図8）。
ちなみに航空貨物での輸入は、数量ベースで全体の0.9％となっています（2018年実績）。

おわりに
今年の1月から5月までの輸入状況を見ると、過去最高であった2018年の同時期と比べ、34.6％増（数量ベース）となっており、今なお、増加傾向となっています。業界によれば、今後も種が無いぶどうの需要は堅調であるとのことであり、今年の5〜6月の出荷予定が上昇していることを示しています。今後も、全国的な消費者の需要が高まると考えられます。
<table>
<thead>
<tr>
<th>年</th>
<th>世界</th>
<th>米国</th>
<th>オーストラリア</th>
<th>チリ</th>
<th>メキシコ</th>
<th>ニュージー</th>
<th>ラン</th>
<th>その他</th>
<th>前年比</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>2000年</td>
<td>2,845</td>
<td>140.9%</td>
<td>1,122</td>
<td>129.9%</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>1,545</td>
<td>147.1%</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>2001年</td>
<td>2,977</td>
<td>140.9%</td>
<td>1,122</td>
<td>129.9%</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>1,545</td>
<td>147.1%</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>2002年</td>
<td>2,996</td>
<td>140.9%</td>
<td>1,122</td>
<td>129.9%</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>1,545</td>
<td>147.1%</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>2003年</td>
<td>3,258</td>
<td>140.9%</td>
<td>1,122</td>
<td>129.9%</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>1,545</td>
<td>147.1%</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>2004年</td>
<td>3,823</td>
<td>140.9%</td>
<td>1,122</td>
<td>129.9%</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>1,545</td>
<td>147.1%</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>2005年</td>
<td>5,051</td>
<td>140.9%</td>
<td>1,122</td>
<td>129.9%</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>1,545</td>
<td>147.1%</td>
<td>10</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>年</th>
<th>東京港</th>
<th>横浜港</th>
<th>大阪港</th>
<th>神戸港</th>
<th>堺港</th>
<th>その他</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>2000年</td>
<td>3,258</td>
<td>140.9%</td>
<td>1,122</td>
<td>129.9%</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>2001年</td>
<td>3,823</td>
<td>140.9%</td>
<td>1,122</td>
<td>129.9%</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>2002年</td>
<td>3,823</td>
<td>140.9%</td>
<td>1,122</td>
<td>129.9%</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>2003年</td>
<td>3,823</td>
<td>140.9%</td>
<td>1,122</td>
<td>129.9%</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>2004年</td>
<td>3,823</td>
<td>140.9%</td>
<td>1,122</td>
<td>129.9%</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
</tbody>
</table>